

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

戸 莉 進 ・ 原田 秀雄 ・ 中尾 正三 ・ 新村 泰子
佐藤クニ子 ・ 酒井 為久 ・ 霜田美津子 ・ 盛田 義彦

< 概 要 >

I. はじめに

昨年度から、本校における生徒の管理・指導の一貫性と発展性を具備した原則は如何に在るべきかを、実践的に追求してゆくことをねらって開始されたわれわれのグループ研究は、第一年度の生徒管理・指導の諸条件についての調査・分析を主とした外的アプローチに対し、本年度は、昨年の結果をもとにしたいくつかの試案を計画・実施・検討する段階に入り、さらに研究の核心である発展的目標そのものに対する検討のメスを加える試みに着手した。

II. 本年度の研究計画と実施

昨年度問題点としてあげておいたうちの「生徒管理・指導の組織化」、「生徒会活動とホームルーム・クラブ活動の関連と調整」の二つを目標として、特に国立大学附属連盟高校部会の共同研究との関連もあり、焦点を「生徒会と H. R の有機的相互作用をねらった生徒の管理・指導」にしぼって、意欲的な L. T 運営の促進、従来の月曜日始業前の中高合同朝礼の多角的・効果的運営をねらった中・高分離方式による朝礼・生徒集会、生徒会執行部と会員とをつなぐ太いパイプとしての室長会議の新設、また生徒個人に対する以上の集団指導からの逸脱や不適応を軽微な段階で発見・指導するための指導カード方式などを計画・実施した報告は、第5報として、また同じような角度から、特に従来高校生徒会への依存度の強かった中学生徒会の体質改善をねらったいくつかの試みは、第9報「中学の生徒会活動の育成」として、まとめた。なお第5報の要点は本年度の国立大学付連高校部会の第8回高校教育研究大会において原田が代表して発表したことを付記しておく。

また、昨年度確認した問題点「生徒の躰」、「高校の倫社・保健・L. T などと中学の道徳との関連」、などに対しては、第6報「生徒の道徳性・親子関係の調査」および、昨年度の第2報「道徳に関する本校の実態」の再現性の確認と、発展をねらった第8報「本校における「道徳」の実態Ⅱ」としていろいろな角度からの切り込みを試みた。

以上のようなわれわれ教官側の気構えは、生徒側に

も次第に滲透していった、日常生活のみならず、体育大会や文化祭などの諸行事、あるいは学校新聞や学園誌などの刊行物にも、本年度は将来が期待される何物かの萌芽のようなものを感じることができるようになってきた。

この萌芽を、健やかに生育させると共に、それらが現在の生徒達の心だけではなく、本校の中にしっかりと根を下ろして、後からくる生徒達をその木蔭に迎える心の緑となるようにさせるための、基本条件を確認し、昨年度の問題点としては「歴史の浅い学校の誇りと拠り所」、「本校の生徒にじっくりした超学年的「道徳」の中核を如何にして求めるか」の二つに対応し、また、明年度の国立大学附属高校部会の共同研究のテーマ、「生徒管理・指導における自主性と指導性」にも対応する研究の第一歩として、本年度はまず、学校に対する伝統や誇りに関する基礎調査を開始し、第7報「学校に対する「誇り」の調査Ⅰ」としてその結果を、まとめた。なお、以上の外、本年度の、そして更に明年度に計画している各種試案の評価方法の研究も兼ね、直接的には、本年度よりの中・高分離方式による、朝礼・生徒集会のより効果的な運営をねらった調査を、中学を中心にして第10報「中学における朝礼・生徒集会に関する二三の調査」としてまとめ上げた。なお霜田が中心となってデータを集積してきている、「中学『道徳』の授業分析」は、霜田の止むを得ぬ健康上の理由から、今回の紀要には残念ながらそのまとめが間に合わなかったが、次回には、何らかの形で報告できるはずであることを付記しておく。

III. 今後の計画

詳細については、各報告のまとめに、それぞれの方向を明示しているので重複をさけたいと思うが、本研究も第3年を迎える明年度は、本校の創立二十周年にもあたり、また慣例の3年に一回の本校の研究発表会を持つ年度にも相当する。従って、その意味でも、われわれのこの団体研究を、これだけは三年間の研究の結果、自信をもって言い切ることができるというようなことはいくつかが具体的に得られる段階にまで高めたいと考えている。

特にささやかながらこれらの研究の一つ一つの成果が、直接本校における生徒の管理・指導に反映して、

本校における「誇り」と「伝統」の創造と伝承に対する原動力を与えることとなるような造仏入魂の角度か

ら、われわれのテーマと真剣に取り組みたい所存である。
(戸 莉)

第 5 報 生徒会と H. R. の有機的相互作用を ねらった生徒の管理・指導

I. はじめに

われわれが生徒に接触する場面は、授業、H. R 生徒会、クラブなどいろいろあるが、そこには必ず教師の立場からの指導が行なわれ、助言があたえられている。そうした指導や助言の加えられる場として H. R の果している役割は大きい。生徒は学校生活の大部分を H. R で学習し、生活している。精神的に大きく成長してゆくこの年代にあって、1人1人についてみるとその発達と個人差、考え方の差は相当大きい。そうした因子の集まりである H. R を1つの方向に向けてまとめあげてゆくには相当の困難が伴うことは言うまでもない。われわれは H. R をまとめあげてゆく1つの方法として H. R における小集団活動を考えてみた。生徒は学校生活のいろいろな場面で、いろいろな集団を構成している。たとえば、勉強仲間、遊び仲間、おしゃべり仲間、クラブの仲間等々、いろいろな集団があり、1人の生徒が1つだけでなく、ある時はこの集団、別の時には他の集団とその所属はいくつかにわたっている。しかもそれらの集団は固定されたものではなく、常に変化し、流動性をもっている。また集団の人数も均一でなく、質的にも他クラス、他学年の生徒がまじっている場合も少なくない。

そこで H. R という1つのまとまりを作りあげ、学校全体という大きな立場からみて、H. R に統一性と方向づけを行うことが、その学校の校風や伝統を作りあげてゆくために重要であるとするならば、どのようにしたらということが課題となってくる。そこで H. R の中をいくつかの小集団に分け、その小集団を或程度固定し、H. R の L. T の計画や運営をそれぞれの集団に課題として与えることによって、それらの小集団に統一性と方向づけを行うことを考えた。

以前、H. R の L. T の計画は H. R によってばらばらで、あまり組織的、計画的に行なわれていなかったために、時には時間をもてあますようなこともあった。しかしこのようにして H. R の全員がいくつかの小集団に分かれ、自分達の H. R の L. T の計画と運営に直接参加することによって、自分を考え、他人を理解し、更に H. R という大きな集団のことを考えるようになり、H. R の一員であるという自覚と責任をもつようになる。さらにこのようにして H. R の L. T の計画と運営が成功するならば、生徒個人及びそ

の生徒を含む集団は、同じ目的に向かって協同し、1つの仕事を成しとげることの意義を知り、それが更に H. R のまとめ、生徒会やクラブ活動への積極的参加の形となってあらわれてゆくであろうと考えた。そこで、こうした H. R 活動に学級担任の適切な指導、助言が必要なことは勿論であるが、基本線における全校的な統一と方向づけを行うために指導部が中心となって、H. R 担任会議、H. R 室長会議を設け、H. R の指導に直接、間接に援助を加えてゆくこと、また別の側面として、生徒会活動の活発化のための朝礼の方法の改善、更にこうした集団からはみだす個人をチェックし、指導するために個人指導カード、システムを中心とした一連の個人指導を考えた。

以上のように、H. R の運営を中心とした、いろいろの試みについて昨年も研究発表を行ったが、今年度もそれを更に発展させ、昨年との比較や新しい試みのいくつかによって、生徒指導の基盤としての H. R のあり方、更に合理的な指導組織の確立と運営方法を見出してゆきたいと考えた。

今回の発表は特に H. R の運営と指導に重点を置き、指導部を中心として各 H. R 担任の協力を得て行ったいくつかの試みをまとめたものである。

II. H. R の L. T の計画、運営と記録

1. L. T の計画

L. T の計画は各学期のはじめに各 H. R ごとにその学期の全体計画をたてる。計画のたて方はそれぞれの H. R によって少しずつのちがいはあるが、大別すると1つは最初に H. R 全体で計画し、その運営をいくつかの小集団で分担して運営する方法と、H. R を最初にいくつかの小集団に分け、その小集団がそれぞれ1時間分の計画をたて、それを H. R 全体で審議、調整するという2つの方法にわけられる。大体の計画ができたところで室長会議をもって、レクリエーションなどのためのグラウンドの使用や、特別教室の使用についての調整、生徒会や指導部より出される全校同一テーマによる討論会の計画や、他の H. R と合同で行う L. T など縦、横のつながりをもったものが話し合いによって計画、調整され、その学期の L. T の計画ができあがるのであるが、その間、担任や指導部が各過程において種々の指導、助言を加えることは言うま